

大人の服育

第3回

衣服の歴史に学ぶ「着る」・「装う」・「マナー」

衣服の歴史を紐解くと、【暑さ寒さから身を守る=「着る」】と、【自分が誰であることを象徴する=「装う」】という2つの異なる源流が見えてきます。

【暑さ寒さから身を守る=「着る」】

「着る」の源流には、原始時代猛獣を狩り、その毛皮を身に纏い、天候や生活の中で危険から身を守るために着用したという歴史があり、やがて植物～布、羊毛～編み物・織物織へとかたちも保温性も進化していったのです。

18世紀中ごろ～19世紀の産業革命期には技術の発達と共に多くの化学繊維が開発され、「暑さ寒さから身を守る」も進化し、高機能繊維の開発へと受け継がれ、現在に至ります。

【自分が誰であることを象徴する=「装う」】

「装う」の源流には部族や集団の中では、誰が長であるのかひと目で身分がわかるように豪華な羽飾りや装飾品を身に纏うことで権力や地位を示し、やがて部族～村を経て国家が形成されると各国の王たちは、黄金や宝石、装飾織物で身を飾り権力を示しました。

特に17世紀フランスのルイ14世は絶対王政を築き、権力を服装で誇示しました。この時代の宝石商・馬具屋は現在では世界的に有名なハイブランド、カルティエやエルメスとなり、今も尚、富と身分を示す装飾品として認識されているのです。

つまり、ファッションや見た目は、本来それを身にまとう人が、ひとめで「何者なのか？」を表すという重要な役割が根底に在るのです。

同時に、衣服を通じての自己表現は身分高い王侯貴族の特権であったということが明白です。



【ファッションの根底にあるものとは?】

やがて時代は流れ、王侯貴族だけに許されていた装飾的な服は「ファッション」として広く庶民の間に広まってきました。つまり、現在私たちが自由に謳歌しているファッションの源流には、「衣服は何者であるかを示すもの」という役割があり、現在は「立場を示すもの」という役割に変化し、制服やセレモニーの衣服が生まれてきたのです。そして、現在は生活のオカージョン(場面、目的、機会)にしたがって、自然に服を着分けしています。大きく3つの目的=TPO(時と場所と場面)に応じて、それに相応しい服に分類されています。

1. オフィシャル・ウエア

ユニフォーム(制服)や(公的)な場で着られる服装の総称。

ビジネスウエアからインフォーマルウエアなど、公的な場や相手に合わせた服装のことを広く意味します。学校なら学生として、その人の立場や仕事に相応しい服装をすることを、周囲の人々から要求されます。

2. プライベート・ウエア

私服・プライベートとは「私的な、個人的な」場で着られている服装の総称。

さまざまな制約から解放され、自分自身が自由に楽しめる服装。

*インドアウエア：家でくつろいだり、読書をしたりと屋内で過ごす服

*アウトドアウエア：レジャーに出かけたり、屋外で過ごす場面に分けられます。

3. ソーシャル・ウエア

ソーシャルとは「社交上の」という意味で、友人の結婚式に招かれたり、葬儀に参列したり、いわゆる、冠婚葬祭での服装の総称。

服装の面で制約を受けることが多く、【改まった場所】ドレスコード=服にルールがあります。

普段なにげなく身につけている「服」も、歴史の中で様々な役割を担ってきたのです。



しぎはら ひろ子

服飾専門家、ファッションエデュケーション協会代表理事

数々のファッションブランドのブランド戦略、プロデュース、商品企画等に関わる。アパレル販売員、スタイリストの服飾指導もっており、近年は経営者や政治家などセルフブランディングで差別化を必要とする人への服飾戦略スタイリングを行う。2007年よりベストドレッサー賞選考委員。